

一人ひとりが 必要な存在

近畿大学附属

豊岡中学校1年

小林 茉珂

夏休みのある日、テレビを見ていると相模原障がい者施設殺傷事件から五年が経過したというニュースが流れた。この事件は、平成二十八年七月二十六日、神奈川県相模原にある「津久井やまゆり園」に元施設職員が侵入し、入所者十九人を刺殺したというものである。このとき私は七歳で、ニュースでよく「やまゆり園」と言っていたのはなんとなく覚えているが、詳しいことは全く知らなかった。

改めてニュースを見て、犯人が「意思疎通のできない重度の障害者是不幸かつ社会に不必要な存在であるため、重度障害者を安楽死させれば世界平和につながる」と言っていたことを知り、衝撃を受けた。意思疎通のできない障がい者は不幸で不要なのか？犯人はなぜそう思うようになってしまったのだろうか。元職員で入所者のことを一番よく分かっていたはずなのに、意思疎通できないことに苛立ちを感じていたのだろうか。

私が小学生の時、近くにダウン症の男の子が住んでいた。小さい頃からお兄ちゃんと一緒に、地区の行事などに参加していた。そのときは、少し目がつり上がっていることは気がついたが、よく走って、よく笑って、よく泣いて、元気でかわいい子だなと思っていただけだった。

私が六年生になったとき、その子は一年生になった。入学してから少しして、その子のお母さんから「六年生には知っておいてほしい」とお話があった。その子は「ダウン症」で遺伝子の異常によって引き起こ

される症状だと教わった。絵本を使いながら、体の成長速度の関係で顔の皮膚が引っ張られるようになって、目がつり上がっているように見えてしまったり、みんなと同じことができなかつたりするということを説明してもらった。

その子のお母さんが小学生のときにも、障がいを持っていて男の子がいたという話もしてくださった。最初はどのように接していいのか分からなかつたが、その子がブランコに乗っていたら、上級生の方が自然にブランコを押してあげたり、手助けしてあげているのを見て、こうすればいいんだということがだんだん分かってきたそうだ。妊娠中に、おなかの子がダウン症だと分かったときも、「この経験があったからダウン症の子を産むことも怖くなかつた。」と話されていた。

私はお話を聞いて、初めてダウン症とはどういうものなのかを知った。お母さんは「怖くなかつた」と話されていたが、私には想像できない不安や苦労があったのではないだろうか。その子は小学校に入って元

気いっぱい過ごしていた。廊下ですれ違ったときに手を振ると笑顔で手を振り返してくれた。その様子はとてもかわいかった。運動会の徒競走では、先生と一緒に走りながら、観客に向かって手を振って、会場を和ませていた。その子がいることで、私たちも元気になったり、うれしくなったりする大切な存在だった。

児童会で、七夕の短冊に願いを書く企画をしたときには、その子が言った願いごとを、六年生が代わって書くようにした。縦割り班での遊びをするときでも、その子ができることはやってみようというにして、できないことを手伝えるようにルールを考えていた。

振り返ってみると、私たちはその子のために手助けしているつもりだったが、その子のおかげで私たちが、いろいろ考えたり、成長したりすることができていたのだと思う。相模原の障がい者施設の入所者も、重度の障がいを持っていたかもしれないが、その子のように私たちに与って大切な存在であったはずだ。犯人の勝手な思い込みで、誰か

の大切な存在を奪っていいはずがない。

私は今年、中学校に入学した。新しい生活にわくわくしていた入学式が終わった午後、足を強く捻挫してしまい、松葉杖をつく羽目になった。知っている子もほとんどいないし、学校の様子も分からない状態で、学校生活を送るのはとても不安だった。松葉杖で階段を上するのも、教室を移動するのも、とても不便だった。

まだ名前も覚えていないそんなとき、私に「だいじょうぶ？」とか、「手伝うよ。」などと声をかけてくれる友だちがたくさんいた。遠足や宿泊研修では、先生方が松葉杖でも参加できるようにいろいろと配慮してくださった。周りの人の心づかいが一つひとつ嬉しかった。

障がいを持つ、持たないに関わらず、誰もが大切な存在である。その人のことを考えて、できないことは手伝いをしていく心を誰もが持てるようにしていくことが必要だと思う。

そのことが何より、自分を成長させてくれることなのではないだろうか。

部落差別を 知り、考える

但東中学校3年

山本 真衣

先日、授業で部落差別について学びました。私は、その時初めて部落差別というものを知りました。なぜ、その土地で生まれただけで差別を受けなければならぬのだらうと疑問に思ったと同時に、今でもそんな概念に囚われていてる人がいると知り、とても驚きました。

私は、日航機墜落事故で亡くなられた田中愛子さんについて学習しました。この悲惨な事故から十九年後の二〇〇四年に、愛子さんのご遺族の元に一通の手紙を送りつけられたそうです。それは、「日航機墜落事故の原因がやっとなかった。航空機事故は被差別部落の愛子に乗っていたため起こった。穢れをもつ

た愛子に乗っていたため起こった。」

というものでした。私は、こんなところまで部落差別があることに驚いたし、絶対に許せないことだと思いました。

しかし、この手紙を見た愛子さんのご遺族は、

「この人自身に罪はありません。差別の歴史がきちんと教えられなかったのです。ゆがんだ偏見だけを植え付けられた、いわば犠牲者なのです。」

と言われたそうです。この言葉に、私ははっとしました。なぜなら、私はこんな手紙を送ってきた人が悪いと思っていたし、私が田中さんの立場だったら、送ってきた人に怒りや憎しみを覚えると思うからです。しかし、田中さんは人ではなく、差別そのものや、差別を残している社会に怒りを感じているのかなと思いましたが。だからこそ、差別をする人も正しい知識を得ることで、変わっていくことができると考えたのだと思いました。私は田中さんの考えに気付いたとき、知らないということとは怖いことだと思いました。愛子さんは、部落差別に直面しても、自分の生き方に誇りをもって生きようとされて

いました。また、愛子さんの絶筆の中にある「今、光ってほしい」という言葉に感動しました。人は、つい10年、20年先のことを考えてしまうけど、今生きているそのときを大切にしたいという考え方にとても共感したからです。私も、限りある命の中のかげがえのない時を大切に生きたいと思いました。

私は、愛子さんについて学習して、部落差別が今でも根深く残っていることや、それをなくそうと努力されている方がいることを知りました。そして、部落差別は自分には直接関係ないと思ってしまう部分がありました。でも、それも深刻な差別問題なのかと思いました。部落差別は、被差別部落出身の人や、その周りの人だけでなく、日本国民全員が関係する問題なのだと思います。なぜなら、差別をしている人に正しい知識を伝えることが必要だからです。だからこそ、私のように自分には関係ないと思っている人も、自分にも関係のある問題として捉えるべきだと考えました。人を出身地で判断するのは絶対にあってはならないこと

だし、許されないことです。私は、差別をなくすために、もつと差別や人権について学び、理解を深めていく必要があると思えました。そして、間違った認識をなくし、正しい知識を広めることが大切だと思えました。私の周りでは、自分たちで人権について考え、標語やポスターを書いたり、授業で考えたりしています。これからもこのような活動に積極的に取り組み、人権に対

する意識を高めていきたいです。差別をなくし、誰もが笑顔で生きられる平等な社会をつくっていくためには、「差別があることを認識し、向き合う」ことがとても重要です。遠い存在として考えるのではなく、自分のこととして捉えることが、差別をなくす第一歩だと思えます。私も、思いやりの心を忘れず、自分のできることから行動に移したいと思えます。

2021年度 第40回「全国中学生人権作文コンテスト」 兵庫県大会但馬地区予選受賞者

賞	受賞者名	学校名・学年
優秀賞	小林 茉珂	近畿大学附属豊岡中学校1年
	山本 真衣	但東中学校3年
金賞	栗原 華菜	豊岡南中学校2年
	清水 晃生	但東中学校3年
銀賞	小田垣 萌果	日高東中学校3年
	西垣 悠香	豊岡北中学校3年
銅賞	神谷 銀二郎	城崎中学校1年
	古谷 萌依	日高西中学校1年
	太田 葵	竹野中学校2年
	井上 夏海	出石中学校3年
	森 青海	港中学校3年